

## 庚申信仰と庚申塔



写真1 青面金剛像  
(向山の宝暦三年銘  
庚申塔)

「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」の十干と、十二支の組み合わせを干支という。干支は60通りあり、年号や月日と合わせて使用された。庚申信仰の「庚申」はこの干支の一つで、中国の道教の次のような説話に基づく信仰である。「人の体には、三尸という虫が住むという。この三尸は、庚申の日の夜に眠っている人の体から抜け出し、天帝にその人の悪行を告げて寿命を縮める。そのため、庚申の日の夜に眠らずに過ごす庚申待(現在でいう庚申講)を行い、庚申待を何度も続けた記念に庚申塔を造立した。市内最古の庚申塔は、上野に所在する万治(1659)年銘の庚申塔であり、江戸時代をピークとして、昭和に至るまで多数の庚申塔が造立された。

基本的な庚申塔は「庚申」青面金剛などの文字が彫られた文字塔と、青面金剛像が彫られた像塔(写真1)であり、上尾市内には、文字塔68基と像塔75基の計143基が、寺社や路傍で確認されている。

青面金剛は庚申信仰の本尊とされ、激しい怒りを表す憤怒相をしており、邪鬼を踏みつけるのが通例である。また「申」にちなんで邪鬼の下部に「見ざる・聞かざる・言わざる」を表した三猿などの図像が彫られている。

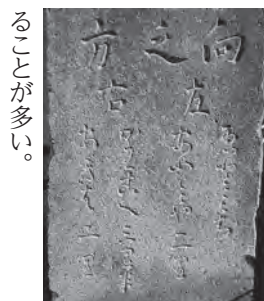


写真2 道標の庚申塔(原市船橋の文化二年銘庚申塔)

ることが多い。

庚申塔の中には「あけを」「はらいち」「かわこへ」などと彫られている庚申塔もあり、これらは道標としての機能も付随されていたことが分かる(写真2)。道標の庚申塔は、町と町を結ぶ道の辻や交差点に造立されていることが多く、29基の庚申塔に、107カ所の行先が示され、中には「三里」「九町」など距離が彫られる例もある。市内の行き先としては上尾と原市が最多で、11基の庚申塔で示されており、その他に平方、二ツ宮、上野、須ヶ谷、畔吉が見られる。市外の行き先としては桶川が11基の庚申塔に彫られており、岩槻、菖蒲、川越が続く。最も遠いのは江戸だが、基本的には埼玉県内の地名や寺社名が彫られている。

このように庚申塔は、庚申信仰を基本としながら、造立した講や村の人々によってさまざまな目的や祈念が込められた、複合的な要素をもつ石造物であることが分かる。

(上尾市生涯学習課)

### コラム column

## 石造物にみる近世の民間信仰

上尾市内には、墓石以外の近世石造物が800基余り確認されている。大多数は信仰に基づいて造立されており、その中で多いのが地蔵信仰である(写真3)。

地蔵菩薩は釈迦の入滅後、弥勒菩薩が如来となって現れるまでの56億7,000万年の間に、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道の六道を輪廻する者を極楽へ導く役割を担う菩薩で、寺院の入口に六地蔵として造立されることが多い。また身代わり、子育て、厄除けなどさまざまな祈念によって造立され、現在

でも「お地蔵さん」として親しまれている。

観音菩薩は、地蔵菩薩ほど多くないものの、近世期の物資輸送を支えた牛馬を供養した馬頭観音や、知恵や財宝などの福德をもたらすとされた如意輪観音が多く造立された。

その他にも百万遍、廻国供養、霊山登頂などの行事達成記念や、動植物・建造物の供養塔など、さまざまな石造物が造立された。

これらの石造物は今でも社寺や路傍に残されており、当時の多様な信仰が反映されている。



写真3 車地蔵(堤崎愛宕神社)念仏を唱えながら石車を回すと、極楽往生できるとされた